

---

# 道行き見えないトリッパー

ガビアル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道行き見えないトリッパー

### 【Nコード】

N7834X

### 【作者名】

ガビアル

### 【あらすじ】

大層な必要性も、必然性もなく、リリカル世界に厨二容姿で混入してしまった主人公の一人称練習作品です。TS要素有りなので苦手な方はご注意ください。

## 飛んでも平気なプロローグ（前書き）

初めまして。つたない拙作をご覧頂きましてありがとうございます。

皆様の小説を読んでいるうちに妄想止みがたく、書きつづっております。

誤字脱字など注意いただければ幸いです。

## 飛んでも平気なプロローグ

声が聞こえる。

「起き ください、誰もが垂涎のトリップイベ がやって  
たよー！」

眠い。

買い換えたばかりの羽毛布団の暖かさに包まれながら俺はみじろ  
ぎをした。

そういえば昨日は徹夜の仕込みだった。眠いのも当……然……

「……ああもう！ 起 てーっ！」

……騒がしい。

布団を頭に被る。……静かになった。今日は祭りでもあったけ  
……さわが……

「……これは てしまishようか……あー、ええと、駄目  
で 。職分ですし全う とですね」

ゆさゆさと揺れる。揺れる。揺れる。ゆれゆらゆら。じしん？

「……うほっ？」

「新感覚な寝ぼけ言葉なのです……いいですか？ まずあなたはト  
リップすること りました。何か があれば聞き入れ とも  
ます」

「……少女のこえが……とりっぷ？」

……とりつぶ……どりつぶ？ とら……ぶ？ とりつくおあと  
ーと……

「少女　ね？　ああ！？　話し　る間にま　が！　も、もう  
　　ったら仕　りません。望　言ってください！」

「んー……羽毛最高、このままねかせ……」

「羽毛……羽　ね。容姿は適　トリッ　の皆様が望むよ  
ものにしておき　」

何か聞こえる。なんかまあ。

「………すきに………して。ね………む」

「　　良い　を！」

ぼーっと布団の温もりの中で、夢見てるなーなんて夢の中で思いながら、俺はまた眠りについた。

目覚めは首筋をなでる冷たい感覚だった。

「………んあ？」

妙に細い声が聞こえる。それよりこの冷たいのは？  
起きてみ………ようとして体が固まった。

冷たいものはどうも生き物だったらしく動いている。首筋を這い  
ずりまわっている。

気持ち悪いのだが、どうも寝起きにこんなドッキリやられると驚  
きで固まってしまうようで、いや思考はどうもさっきから回るのだ  
けど、なんなんだこれ。なんなんだこれ。カメラはどこだ、氷で撫

で回してくれてる奴はどこだ？ うわ動いてる動いてる、蛇か蛇なのか？ 蛇っぽいって！

「っヴおうあっ！」

我ながらどうかと思う奇声をあげながら、慌てて布団から飛び出し、首に巻きついてるものを引き剥がして投げつける。

木にべちつと当たってその30センチほどの蛇はカサカサと慌てて茂みに逃げ込んだ。

「……お、お、驚えたー………て………あ？」

ぜーはー荒げた息を落ち着ける暇もない。  
何せ見ている目の前の光景が光景だ。

「……森？」

そりやもう立派な森だった。

樫、ブナ、檜。人の手あまり入っていないのだろう雑木がひしめき、ツタが絡まりあっている。

振り返って後ろを見してみる。

「布団だな」

さっき慌てて飛び出したせいかくしゃくしゃになった布団がある。それは別段おかしくない。

地面の上に直敷きしてあるのを除けば。

その向こうに10mほどの澄んだ池があつて、そこから手前は花が咲き乱れ、ザ・草原と言った感じののどかな風景になっているのを除けば。

先ほどまで変な夢を見ていたことを思い出す。

「また夢か？」

夢を夢と認識できるのって明晰夢というのだったか。

初めて見たかもしれない。しかし、蛇で目覚める明晰夢って、夢占いにかけてたらエライ酷い結果が出そうだ。

なんとなく、池の方に歩いてみる。

物語だと池の中から美人が出てきたりとか、未来の知識を映したりとかかな？

だが、覗き込んでみると、映し出されたのは。

「なんだこの子供……」

見たことない子供だった。

俺が右手を上げるとその子供は左手を上げる。

俺が左手であいーんのポーズをとれば、その子供は右手であいーんをした。

……いや夢なんだから百歩譲って子供になるのはいい。回帰の欲求なんて誰にでもあるし。

でもこの姿はねえよ。

「アルビノ銀髪オツドアイとか……」

こんな欲求が俺にあったのか！。厨二なのか！。中学の時に発症しなかったのが悪かったのか！。

少し逃避気味な思考が揺れる。

この調子だと邪気眼とか隠された人格とか黒翼の堕天使とかそういうのまで搭載されて……と、翼とか思い浮かべた時だった。

「ぶぶつ……おうふ……息ぐる……し……ぐあぁ」

寝巻きに着てたジャージの背中がなんだかもこもこって動いて盛り上がって、てか狭い。狭い！ 必然首が絞まって、締まる締まる締まる。ぐおおお……

限界点に突破しようという時、びりべりばりばりと、ジャージの背中が破けはじめ。なんと翼が……

「生えた……」

なにそれ怖い。

色は真っ白でもふもふ具合はなかなか良さそうだが、いや漆黒の堕天使とかにならずに済んで良かった……のか？ え？ えー？

いやなんだろうこれは。

うん。明日聞いてみよう夢占い。

こんな力オスな夢は何とつかすこすぎる。

いい年した男がとか、ふっと思っただが、いやコレだけの夢だと十分話しのネタになる。

ひとまずこれからすべきことは。

「寝るべ……」

いそいそと布団を直し、もぐりこむ。

固く眼をつむり布団を頭から被る。

翼が邪魔になるようなので横向きに体を丸めて。

なんだか……いろいろなんだか……夢でも脳は疲れてたのかもしれない。

きつとそうだ、新作メニューの仕込みで徹夜なんかするからこんな夢を見るんだな。

何も考えなくなかっただけかもしれないが。今度こそちゃんと真



つ 当に現実に目を覚ましますようにと祈る。  
急速にぼんやりしてきて……………意識を手放した。

## 一話

今日は本当に酷い夢を見た。

寝ぼけて誰かに応対しちゃったなーと思ったら、草原で目覚めて、自分がどこかの厨二小説などでよく見かけるような特徴を兼ね備えたりしていて。

あまつさえ翼とかもこもこと元気に生えて、なにこのキメラ。いや天使ってよく考えたら人と鳥のキメラだよねとか思ったり思わなかったりした。

そんな夢を見たのさ。

「で、終わりになればよかったのに」

そんな夢、いや悪夢は際限なく、容赦なく、否応もなく続行中だった。

流石にあれだけ寝たらもう寝ることも出来ない。

恐らく今は昼。

なんとたつて太陽がいい具合に有頂天。俺の心も温かく照らしてくれればいいのに。

ため息が先ほどから連続して出ています。

なぜため息がでるかというと先ほどから嫌な予感がするわけで。

それは股間でむずむずしてるわけで。

いやただの尿意なんですけどね。

とてつもなく嫌な予感しかしない。

「そうだ、小便行こう」

京都行こうみたいなのりであえて軽く逝ってみる。誤字ではない。これは逝くが正しいのだ。

ちよつくら木陰に立って、まあ、寝巻きのジャージのままなので下ろさせてもらいます。

トランクスもちよつと下ろしてみまして、また戻して。

「見なかったことにしてえ……」

涙が溢れた。

なんたって、長年付き添ってくれた我が相棒が。マイ・サンが。愛すべきエツフェル塔が。ビッグダデイが。ごめん嘘ついたビッグつて程じゃない。

「……………無めい……………」

へそまで届くようなご立派なもんじゃなかったけど。

毎朝自己主張してくれて、時にはちよつと困ったちゃんだった愛息。その姿が影も形も。

小さくなってたとか、しぼんでるとか腹の中に納まるという空手の奥義とかでなく。見事に玉も無い。

明日のジョーが灰になるような心境。

俺は灰になるという感覚を生まれて初めてその身に刻んだ。

思考停止とは便利な言葉だと思う。

応用範囲も広く、例えば誰もが考えてなかった事なのに、いざ政治家がそれで間違えればだれそれは思考停止に陥っていたことを反省しなければ云々なんぞと叩かれたりもする。

ただ時には、精神的に追い詰まっている時などにはこの思考停止というものは切実に必要となるものらしい。

性転換とかなんかクレバスがあったとかそんなんは思考のダムに

止めて考えないことにした。考えないったら考えない。  
なんで、とか、どうして、とかは時間のある時にゆっくりゲーム  
でもしながら考えればいいことだ。

『まず、もしもという時は状況に適した優先順位を付けて判断する  
ことだ』

そんな台詞を迷彩服を着ながら俺に語った親父を思い出す。  
別にアフガン帰りの軍人とかベトナム帰りのグリーンベレーとか  
ではなく、至って普通のサバゲーマニアである。

だが、マニアというものはこだわりも大きいのか、思い出すと、  
どこの軍事教練だよという知識もある。

「ひとまず目先のことを考えよう。それがいい、それに決めた」

本当に思考停止とはありがたい。

何しろほんと投げ出された五里霧中。何がどうしてどうなったと  
いう脈絡もなく、順序もなく、訳が判らない状態だ。……この場合  
の優先順位はというと、自己診断、状況把握だろうか。

気を取り直して、後方の静穏という名前が付きそうな池に向かう。  
上流から流れ込んでいる小さな川がせき止められて直径10mほ  
どの池のようなものになっているようだ。岩がごろごろあるわけ  
もないので、それほど溪流というわけでもないようだ。

水に触ってみるとかなりの冷水であることが判る。近いところに  
湧き水の源流があるせいなのだろう。

水面に映るアレな姿を見てため息を落とすも、いつまでもじっと  
しているわけにも行かないので、勢いよく水面に顔をつける。

「……ぶぁー冷てえ」

いい感じにすつきりしてきた。

拭くものもないので、破れたジャージの上着で拭う。化繊は水の吸いが悪いがこの際仕方ない。

「さあて、まずは……」

自己診断。これはあまり考えたくないが、否定しても仕方ない。

この、明らかに日本人らしからぬスラブ系というか、ロシア人と言われて思い描く典型のような顔立ちで、銀髪オッドアイの痛い容姿の人物は俺ということらしい。

髪の長さはあまり変わってない。耳が隠れるか隠れない程度のショートで、割とざんばりんと切つてある。

色はもう笑うしかないようなプラチナブロンド。さらさらの直毛である。アーモンド型の大きな目に高く通つた鼻梁。色白というか色素ねえだろというくらいの白い肌。血の色が透けて見えるので冷水で刺激受けた頬は今ピンク色だが。うわあ。

くじけるな俺。イタくてもくじけるな。がんばれ、やればできる俺はできる子だ。自己暗示をかけて再起動する。

目は左目が琥珀、右目が青。金目銀目という奴のようだ。瞬きを二回。水面に映る姿も瞬きを二回。睫長い。爪楊枝8本乗せがいけそうな感じである。

いやまあ、そこまでは人間の範疇だ。それはいい。よくはないけどいい。

背中の感触が問題だ。この至つて普通に生えてる翼。なんだろうが、背中に腕でもついているかのような。天津飯の四妖拳、背中に腕が生えて手数が増える技だったか。そんなのを思い出す。

腕とは大分関節の付き方が違うが、何というか、当たり前前に普通に動かすことができる。手の平をパーにするような感覚で翼がばさーと開いたり。ぐつとすると折り畳めるとでも言えばいいのか。…いかん、ぐつとしすぎたら攣つた……うおお、痛え……びくびく

する羽根が微妙な気持ちを増幅する。

……どうしようか、大分人間辞めてしまっている気がする。この上さらに額に目でも出来たら、目も当てられない。というか人目に当たりたくない。幻想郷とでも立て札に書いて山に引き籠もるしかない。

落ち着こう、落ち着こう。深呼吸を数回して強引に落ち着く。

ともあれ、この羽根の長さは目一杯広げると片羽根で2メートルくらいか、そのくらいまでは広がる。両方広げれば、俺は体長4メートルの霊長類ということになる。いや、羽根生えてるから鳥類なのか？ 混ぜって霊鳥類？ やめよう。なんだかCOMPとか持っている人に使役されそうだ。コンゴトモヨロシクとか言う気はない。

そして、体を動かすのにまるきり違和感がなかったので気付かなかったのだが。……縮んでいる。洗濯機にかけられたニットのセーターのように縮んでいる。具体的には三分の二くらいに小さく。今の身長は120センチと言ったところだろうか。手足の長さも短く、手の平に至っては何というプニ具合。マシユマロと勝負が張れそうだった。……何とか子供にしか見えない。いや認めよう、今の俺は子供の体であると。認めざるを得ない。よし、自己診断はひとまずこれで……。

と、そこまでが俺の限界だった。

「ありえん……ありえん……」

頭をかかえてうずくまる。

夢だろ醒める醒める醒める。

「うあー……」

そんな自己診断にも思考停止という名の蓋をして、のろのろと立ち上がる。

今の俺を誰かが見れば、レイプ目というものを拝めたかもしれないかった。

「まあ、なんだ……状況、把握せんと……」

既にグロッキーです。

ギブアップボタンかナースコールがあれば連打していると思う。リングにタオル投げていいならセコンドに百本はタオル投げさせて。と言っても、いつまでこの状態でも仕方ないので。

大きく息を吸って吐く。頬に両手でビンタで気合を入れ。

「……痛うあ！」

思ったより力があつた。というか歯で口の中を切ってしまった。ひりひりするが、これはこれで気が紛れたので良しとする。

まずやる事は……

あたりを一通り探索した、あまり詳しいわけではないが、植生、また、木に付いている獣毛をチェック、危険な動物がいないかを確認する。一応熊避けに一定感覚で音を鳴らしている。

円を書くように池の周囲を軽く探索した後は、歩きやすそうな、木々の隙間の多い場所を縫って、放射状に探索をする。

迷わないように石でサインを残しながら木々の間を歩いていく。

『森歩きは急いではならない。落ち葉に隠れて穴があるなどはよくある事だ、大雑把な の事だ。注意しろよ』ふとまた、変人親父殿の台詞を思い出す。大雑把は自分だろうに、よく俺の事をそうけなしていたものだ。

……確かに、連絡手段もない今、怪我をしたら笑い話にもならない。ゆっくり着実に歩みを進める。 1時間も歩いた頃だろうか。唐突に森を抜けた。

「……おおう」

感嘆が出てきてしまった。  
森を抜けたと思ったら切り立った小高い崖になっていた。

クライマーでもないのに降りられる自信はないのだが、そこから見渡せる風景こそが有りがたいものだった。

街である。

距離は10キロメートル程だろうか。昼間というのに車も行き交い、それなりに活気のありそうな雰囲気である。中心部と言えそうな所にはビルが立ち並び、俺から見て左側は緩やかな湾となつて、海に面した公園や、倉庫街が広がっているようだった。

港湾都市と言えばいいのだろうか、ひとまず、おおまかな方角だけ確かめ、別ルートで近づいてみる事にする。

太陽が出てるうちなら、おおまかな方角だけは判る。

日が暮れる前には街に着きたいな、と疲れる足を持ち上げてまたゆっくり歩きはじめた。

「ついた……」

やっと森の切れ目というか、人里につながる道路が見えた。人家も見える。

どうやら山間の住宅街のような所に出たらしい。

途中で拾った手頃な木の枝を杖にして、ぐてーっとへたりこむ。空を見ると既に夕方。

木苺とか見かける度にちよこちよこ食っていたものの、流石に腹も減る。カロリーが足りない。

とはいえ、疲れているのは精神的な部分らしく、体は妙なことにあまり疲労を感じていなかったりする。3時間以上も道無き道を山



歩きすれば成人男性でも鍛えてない限り疲れは感じると思うのだが。そのあたりの感覚の違いというのがまた少々気持ち悪い。脳が体の動かし方を理解していないような気さえする。……考えるどつばにはまりそうなので、これも考えないことにするのだが。

「さて、とりあえず交番にで……も……？」

俺は自分の今の容姿を思い出して頭を抱えた。

「どこの世界に羽根生やした子供がいるんだよ……身分証明だって出来ねえし、前とは見た目も全く違うし……」

住所不明、戸籍不明、世界に類を見ない類の奇形を持った、保護者もいない子供である。

最悪の場合、闇社会で流通ルートとか、どこのバッドエンドですか。

悪い方向に考えるとキリがない。

ただ、この見た目で目立ちたくもないし、人目を忍んで家族に連絡、かね？

何しろ格好も普通に恥ずかしいのである。

羽根出す時に、上着は破れて、背中で結んでいる状態。

泥で汚れたジャージに、靴など当然ないので泥だらけの靴下。

背中から生えてる白い羽根。

どこの違法研究所から逃げ出してきたの？ とか言われそうだが、ライトノベルなら。

そんな事をつらつらと考えながら、意識して人家から距離をとって歩く。

時間としてはもう夕方を過ぎて、暗くなりかけている。

先ほどまでちらほらと帰宅する小学生が見えたのだが、そろそろ夕食と団欒の時間ということなのだろう。

実のところ。

「飯の臭いが漂ってきて腹が……」

今の俺の姿を見る人が見れば、ザ・シヨンボリというタイトルで写真撮ってくれるんじゃないだろうか。せつない。空腹時に美味そうないせつない。マツチ売りの少女も確か、空腹なのに七面鳥を食べる家庭を夢見ているなんて描写があっただけ……判る、判るぞ少女よ。食いたいなあロースト七面鳥。中はジューシー、外はカリカリ。バジルとオリーブの香りがぷーん。

「うぐあ、とんでもないものを想像してしまった……腹減った……もう、性犯罪者のロリペド野郎でもいいから見た目に釣られて飯くれんだろつか……」

実際に襲ってきたらねじり潰すが。何をとは言わない。

自己主張を繰り返す胃袋を抑えて、気のない公園があったのでとりあえず水で腹を満たす。日本はすばらしい、水道水が飲み放題だ。涙が出そうになっているのはきつと気のせいだ。

とりあえず水分補給したせい、多少は余裕がでてきた。

一つ思った事があり、公園に設置されている自動販売機の下をよーく見る。普通なら懐中電灯で照らさないと見えないところだが、目をこらす。発見。そこらへんの枝で手繰り寄せる。

100円硬貨をゲットした。100円硬貨を2枚ゲットした。本当は届けないと遺失物横領になるのだが、非常時なので堪忍してもらおう。

自分自身でよく判っていない部分も多いのだが、どうもこの子供ボデイ、やたらスペックが高い。

夜目が利くわ、力強いわ、スタミナはあるわ、人の気配だの臭いにも敏感だったりする。

野生動物にでもなってしまった気分だが、羽根生えた妖怪とでも思えばおかしくないのかもしれない。妖怪……そんな事思いつく時点で段々俺の常識も壊れているようではあるが。

ともあれ、使えるものは使う。

何より、これで電話が使えるのが大きい。

というわけで早速公園の公衆電話で、硬貨投入。自宅の電話番号をプッシュプッシュ。

しかし、いまだにこの昔ながらの緑色公衆電話が残っているというのは懐かしさをそそる。

「携帯が出回ってからはめっきり見なくなったからなー」

今となればこの電話ボックスのべたべた貼られている、教育に非常に悪いピンクチラシも懐かしい。

プッシュし終わると、数秒の時間の後こう言われた。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

心臓が早鐘を打つ。

「間違えた？」

再度硬貨を入れてゆっくり口で確認しながらプッシュ。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

動悸が止まらない。なのに血の気が顔から引くのが判った。

三度、四度掛け直す。頭で番号が間違っていないか、思い出しなが

ら。

しかし、つながらない。

隣近所の……小学生の時から幼馴染、腐れ縁といってもいいかもしれない。奴のところに電話をかける。

今度もつながらなかつたらどうしようか、と少し指が震えた。

数秒待つと、電話のトルルルというコール音。

大きく息を吐いた。やがて、ガチャと音が響き相手が出る。

「はい、溝呂木です」

若い女性の声ではつきりそう言われた。

「溝呂木さん……ですか？　でなく……」

「はい、違いますよ？　お間違えでしたか？」

すいません間違えました、と言って切ったが、声はかすれて届かなかったかもしれない。

動悸が激しくなる。

冷や汗が止まらない。

ふと目が備え付けの電話帳に留まった。

探す。

覚えている限りの近所の新聞屋の名前、工務店の名前、工場の名前、魚屋の、小さい服屋の、行きつけの喫茶の、よく買い物に行くスポーツ洋品店の、腐れ縁の友人が大好きなゲームセンターの。

一致する店が存在しなかった。

それどころか、以前住んでいた、町の名前そのものが見当たらない。

判らない。何でどうしてこうなったのかが判らない。得体の知れない恐怖がこみ上げてくる。

唯一つ判るのは。

「……はは。やべえ……本格的にやべえ」

人との繋がりは何一つない、本当の意味で孤独という事だった。

気が付いたら、最初目を覚ました時と同じ場所に帰って来ていた。顔はぐちゃぐちゃで涙だか汗だか鼻水だか判らない感じにグロクなってしまうっているようだった。

「……ああ……あー、はあ……」

なんだか、頭がぐらつく。池の水で顔をばしゃばしゃゆすいでとりあえずグロさを直す。

後ろを見れば俺と唯一つだけ、つながりのある布団。探索する時に枝に干しておいたものが目に止まる。

その月明かりに照らされた青白い布団が、なんともシユールで皮肉で滑稽に思われて。

「……あー、本格的に駄目だ。精神的に病んでそうだな俺ー……。ぷっ……くくツかっ……ぎやははは！」

笑いがこみ上げてくるなんて。

腹が痛くなるほど地面を転げまわって笑って、笑って、笑って。真っ白な羽根がドロドロになるまで転げまわって。

発作のように止まらない笑いの衝動が収まったのは、池にダイブして一通り泳ぎまわった後だった。

魚くんたち驚かせてごめん。おいちゃんも疲れてんのさ。

冷たい水の中でぶかぶか浮かびながら月を眺める。

眺めながら考える。

なんとなく、今まで気にしててもあえて考えなかった事を考える。

「俺の名前……なんだったけかなー……」

アルファベットで3文字、漢字で1文字だったと思った。

ただ、いくら思い返しても、墨汁をたらしてふきとったかのように曖昧になってしまう。

年齢も同様だった。

気付かないようにしていた。でもここまで考えるとどうしても気付いてしまう。

記憶の中のサバゲーマニアで破天荒で適当な親父も。

インドアでドラマに一喜一憂する妙にホットケーキが上手い母も。子供の頃からエアガンで遊んでいたらいつの間にかガンオタからアニオタへ変異していた隣の悪友も。

記憶はあるのに、思い出がない。顔も思い出せない。言葉は思い出せるのに。

水彩絵の具で描いた絵に水をぶちまけたかのようにぼかされている。

「……あー、うつだしのう」

「ごぼんと池に潜ってみる。沈む、沈む。あまり深いわけじゃないが、このまま沈めば底なし沼のように飲み込んでくれないだろうか。このボディだと水の中でも隅々まで見渡せる。

水底でザリガニが威嚇していた。指を目の前に出すと挟もうとしてくる。かわしてつつく。挟もうとする。かわしてつつく。かわしてつつく。逃げようとするので背中をキャッチ。捕まえた。

卵を大事そうに抱えている。声が出せるならしゃぎーでも言い出しそうな感じに怒っている。

なんだか力がいろいろ抜けた。

ザリガニは手放す。

水面に顔を出して息を吸い込む。

手のように自在に動かせるようになった羽根でばちゃばちゃと泳ぐ。バタ足の要領だ。バタ羽根？

水から上がって羽根の水を切る。絞った上着で体を拭う。

開き直った。

そもそもそんなに深く悩むのがとても苦手な方なのだ。多分。

落ち込むだけ落ち込んだら後は寝るだけ。

ひっかけておいた布団を草の上に敷き、虫除けの松葉を周囲に散らす。

明日は早くに起きてみよう。

そんな事を思いながら、すっかり馴れた翼にくるまって、上に布団を被る。

今は涼しいようだからいいけど、夏は暑苦しいかもしれない。そんな事を思いながら意識は薄れていった。

## 一話

流石に三回も同じ風景を起き抜けに見てしまうと、夢オチという現実逃避も成功しない。

そんな事を思いながら目覚めた朝だった。

思い切り伸びをしてコリをほぐす。空はまだ薄暗く、朝もやがかり、空気はひんやりとしていた。

気の早いキジがどこかでキエー、キエーと威勢のいい声をあげている。

昨日は混乱して騒いで泣いて寝て、何とか感情は落ち着いた。実は落ち着いてないけど、今は置いておき、今日やること、やるべきことを思い浮かべる。

「衣、食、住。それに情報か」

考えてみたら、昨日見た、港湾都市っぽい街の名前も確認していなかった。本当にせつぱつまつてたようだ。

今自分がどの場所に居るかぐらいは確認しないと。いや、ここは本当に日本なのか。日本に良く似たパラレルワールドとかの方が余程安心する。

ただ、とりあえずの方針は決まった。まずは

前方のブロックの壁に隠れて息を殺す。

周囲からは生い茂るツツジに隠れて、この小さい身は周囲からは完全に見えなくなっているはずだ。

出勤する父親と思わしき人達に、母親と思わしき人達。それに全体的に見かける子供は幼稚園か保育園、あるいは小学生が多い。年



齡が高くて中学生といったところか。

昨日確認した住宅街は、やはり思っていた通りの家が多かったよ  
うだ。

山に近く、新築が多く、道に沿って一戸一戸の土地が整備されて  
いた。

一つ一つの土地そのものはやたら広いというわけでもなく、恐ら  
く都市計画で整備された分譲地なのだろう。

こういう場所は若い夫婦が集まりやすく、当然子供も多くなる。  
さらに小さい子供は成長が早く、衣服などはほぼ使い捨てに近い状  
態になってしまうことも多い。

やがて、人通りが少なくなり、全く人が居なくなつたのを見計ら  
い。俺は目当てのものをかっさらって、そのまま走り去る。

50メートル先の森に向かい獲物を抱え、風になる。

森に飛び込み、先にマークしておいた安全地帯、大きな木の  
ウロがあり、隠れるのに調度良かった。ところまで行き着き、大き  
く息を吐いた。

「見られないでよかった……」

何せ今の自分の格好といたら、ヨレたジャージの下と、すりき  
れたソックス。上半身は上着というよりボロ。ついでに翼付き。こ  
んなのが後生大事に半透明袋を抱えて全力疾走してる姿とか見られ  
たら、なんというか……死ななくても大事なものが磨り減ってしま  
いそうだった。既にいろいろ遅い気もするが、せめて羞恥心だけは  
人並みにとっておきたかったのだ。

息を整え、さらった獲物を確認する。

そう、今日はどうやら燃えるゴミの日らしかった。

選んだ獲物はこの服がたっぷり詰まったゴミ袋。子供向けの服も  
それなりに詰まっていそうだった。

ほくほくと中身を確認し、使えそうなものを選び分けていく。

整理中、整理中、整理中。

うん……なかなかの物がゲットできた。

大人の大きさのワイシャツ、サイズが合わなくなって捨てることになったのだろう、あまり汚れもない。

普通のTシャツ3枚、子供にサイズが合わなくなったようだ。デザインが……某ネズミのキャラ物なのがちょっとアレだが。今の身体にぴったりなのが悔しい。

それに未使用のタオルが出てきたのには驚いた。貰い物で、余ってしまったのだろうが、なんとも勿体無いものだった。ともあれ、有り難く使わせてもらおうが。

嬉しかったのは運動靴が。少し大きいけど、十分履ける。裏にガムが付いてたが。今の親はこのくらいでも捨ててしまうのだな。ともあれ、履物は嬉しい。今まで靴下で外歩きだから、大分足に傷も出来てしまっていた。早速ガムを枝で削り落として履かせてもらおう。

……妙なのも大分出てきたというけど、使用済みと強く自己主張しているかのような、何かカペカペになっているセーラー服とか大人用スクール水着とか。蠟のついた麻縄とか。うんまあ、地面に埋めて証拠隠滅しておこう。というかこういうものはせめて紙袋で隠してからゴミに出したほうがいいと思うが……うん、ゴミ泥棒が言えることじゃないな。

少々げんなりとしつつも整理を終え、ひとまずこれで身支度を整えることができそうだ。一発目のゴミ袋でこれだけの当たりというのも相当に運が良かった。衣類が調達できるまで数回は同じことを繰り返すのを覚悟していたので幸先の良さに鼻歌が出てしまいそうになる。

最早、上着というよりボロか布切れと形容しなくてはならないジヤージを脱ぎ捨て、ワイシャツを羽織る。この大人サイズのワイシャツなら、翼をきっちり折り畳めば……

「……おうあってててててててっ」

羽根が攣ってしまった。悶えながら突発的に思いついたあの台詞が何とはなしに口から出てしまった。

「ぐうっ……白翼を持たぬものには判るまい……」

……痛みは紛らわせたものの、周囲に誰もいないというのに万が一を考えキョロキョロ見回し、一人赤面してしまった。いやホント、何言ってるんよ俺。

「うし、これでよし！」

身支度を整え……ズボンに類するものは無かったので元のヨレたジャージのままだが、せめてもと、くつついた埃だのゴミクスだのを綺麗に払って、準備は完了。ぶかぶかのワイシャツで翼を隠すことも何とかできているようだ。力入れてないとこもこしてくるので、それなりに大変だが、背に腹は代えられない。

思わず走り出しそうになってしまつ足を押さえながら、早足で街につながる道路に踏み出した。

向かう場所は高台から確認した総合デパート。行く戦場は地下一階食品売り場。

さあ、試食品の貯蔵は充分か？

「……はっ！」

何か、イタイ思考が混入した気がする。

身体に影響されて精神年齢が下がっているんだ。そうなんだ。絶対そうだ。理論武装は完璧だ。嘘だごめん。

頭をぶんぶん振って、とりとめのなくなった思考を追い出す。  
なんだかんだで、自己主張を繰り返す胃袋には逆らえず、途中から駆け足になってしまった。

いつの間にやら目的地に到着していた。

「……はらへった……はらへった……はらへった……」

ヨダレが口から溢れそうになってしまう。

なにやら凄い顔をしていたのかもしれない。

目の合ったサービスカウンターの人に、全力で視線を逸らされた。

ああ、まあいい。そんなものは些事だ。

なにしろこちらら、ココのところまともに食べてない。

地下へ続くエスカレーターを下り、試食品と思わしき肉を焼く香りが漂う。胃袋が際限なく自己主張を繰り返し、口の中にヨダレが充満する。

俺はごくりと溜まったヨダレを飲み込み、息を整え、『食欲』という名の人間三大欲の一つを全力で解き放った。

台風一過。

まさにその四字熟語がふさわしいかもしれない。

多くは語らない。ただ、一言だけ。

デパ地下の従業員さん、試食荒らしの事、本当にごめんなさい。

いずれ、金持ちになったら、この店でたっぷり散財しよう。

やっと満たされた腹を抱え、久しぶりに余裕のある気持ちで散策をする。

メインストリートというほどではないのだろうが、それなりに広い道に街路樹が植わり、ぼつぼつと散発的に小さな店が並ぶ。商店街があるとしたらその端のあたりなのだろう。腹ごなしにのんびり

散歩をするにはぴったりの場所だった。

ただ、先ほどは食に夢中だったのもあって気にしなかったのだが、道行く人がちらちらとこちらを見てくる。と言っても、犬に散歩させているお爺さんとお婆さんくらいしか見かけなかったが。

やはり目立つのだろう……白人にしても真つ白な肌に銀髪でオツドアイ。小汚い格好。俺もそんなの見かけたら驚く。

ふと思いつて、人通りの多そうな方に向かう。少し前にちらつとメインストリートっぽい通りを見かけたのだ。そこは昼前というのにそれなりに人が歩いているようだった。

自分自身がどのくらい目立つかを把握しておこうかと思つての事だった。

「う……」

呻いてしまった。その通りを歩き始めて数分にも満たない時のことだ。

どうにも視線が刺さる刺さる。以前は全くこんな経験がなかったので、一目散に逃げたい衝動が心でもたげる。

とはいえ、変な格好の外人の子が歩いてる、程度の認識で済ませてくださいるらしく、一番緊張したお巡りさんの傍を通る時も、訝しげな顔をしたもののスルーしてくれた。

日本人の事なかれ主義に感謝。

ともあれ、やっと、というかようやくというか。現在地が判明した。

いや道路の案内標識に『海鳴駅2km』と書いてあるわけで。

よくよく見れば、道路沿いの標識にも市名が書いてあるわけで。

……俺は本当に今の今まで余裕を無くしていたらしい。というか自分の間抜け具合に膝が折れそうになった。頭を抱えて振り乱したくなった。この調子だと、何か他にもあほな事やってんじゃないのかと心配になった。

と、ともあれ、次のことを考えることにする。思い悩んでも仕方ない事はあるのだ。

衣食はなんとかなったので、次は住だ。

と言ってもこれはあまり心配していない。季節柄はどうも春と夏の合間らしく、野宿も難しくないシーズンだったからというのもある。長い目で見ればどうかと思うが当座は何とでもなるだろう。

ひたすら足で探そうかとも思ったが、ふっと思いついたこともあり、前に高台から一望した時に見えた銭湯に向かう。目当ては昨日拾ったなけなしの小銭で一つ風呂……といきたい所だが違う。ああ、コーヒー牛乳が恋しい。腰に手を当て、親父飲みたい。いや童心に帰ってイチゴ牛乳もなかなか……。

と、思考が逸れた。狙いはその高い煙突にある。昔ながらの銭湯の近所の子供なら一度や二度はよじ登って怒られたであろうあれだ。街の中から町並みを一望すれば、あるいは雨風のしのげそうな廃屋でも見つかるかもしれない。

結果から言えば、想像の斜め上のものが見つかった。

しかし、煙突に登って見回していたら、銭湯のおっさんに見つかってしまい、こっぴどく怒られたのは置いておく。

気を取り直し、見つけたお目当ての方に向かった。

方向としては元来た方向、俺が最初から居た山林の方向だ。

山と街の中間のような場所、通りから少し外れた側道に、周囲の田園風景とはまるで場違いなようなそうでないような、こんもりとした雑木林がでんと構えていた。

周囲は錆び錆びのフェンスに囲われ、とりあえずの境界を作っている。

入り口と思わしき鉄の門には、年代ものの鎖が張られ、封鎖されている。ところどころが割れ、雑草が生い茂るアスファルトの道が

その雑木林の中に続いていた。

「放置されて、ウン十年は経ってそうだな……こりゃ」

おじやましーすと小声で呟いて、1メートル少々の高さの門を飛び越える。

もはや山道と言ってもおかしくないようなボロボロの道を歩く事5分。ちよこちよこ曲がりながら、300メートルも道なりに歩いた頃だっただろうか。建物が見えてくる。

「……到着ーと。しかしこりゃまた……雰囲気のあることで」

思わず一人ごちてしまう。これは無理もないと思う。じやりじやり音を立てながら見て回る、靴を拾えて本当によかった。

塗装も落ち、虫食いのように穴が開いているトタン屋根。劣化しめてくれ上がっている外装。ところどころで剥げ落ちて鉄筋しか残っていない場所すらある。

窓ガラスがかるうじて残っているのが奇跡のようなものか。床には落剥した破片だのなんだのとわからないものがビスケットのケースのように散らばっている。

最近流行りになっていいるらしい、廃墟巡りのコミュニティサイトに投稿したくなるような、立派な廃工場だった。

工場そのものの敷地も相当広く、かつては相当大口の仕事もしていたのだろう事は想像できる。今は工場の中身はがらんどろなので、どういった業種かは定かではないが、

ともあれ。

「あてが外れた……」

ちよつと落胆する。遠目で見た限りではそれなりにボロくも屋根、

壁が見えたので、雨風はしのげるとは思っていたのだが。間近に来て見ると劣化が酷い。

これは、雨でも降ってきたら、神社の軒下でも借りるか？ いや、考えてみたらこの子供ボデイなら泣き落として泊めてもらえるんじゃない？ 泣き落としとか正直ないな、却下。

などと、益体も無い事をつらつらと考えながらも、工場の探索を続ける。

と言ってもそう複雑な作りになっているわけでもなく、何のひねりもない箱型の建屋なのでそう見るところもないのだが。

外に出て、ぐるっと周ってみると、どうも最初に見えた一番大きい建屋だけではなく並行して二の字を描くように工場建屋が並んでいるようだった。

だが、さらにその奥にある小さな建物に目を惹かれる。

もしかしたら、工場の事務所あるいは休憩所として使われていたのかもしれない、工場の建屋より随分手のかかってそうな小屋がそっくり残されていた。

あてが外れたなんて言うてごめん。これは大当たりだったかもしれない。

入り口の戸はさすがに体を成さずに外に倒れこんでいるものの、おもむろに覗き込んでみれば、6畳ほどの土間……というかコンクリートが打ちっぱなしになっているだけだが、その中央に昔のダルマストーブが鎮座し、壁際には食器棚らしきものが置かれ、その近くに木製の椅子が無造作に積み重ねてある。

土間の奥には板張りの床になっている部分が4畳ほど。仮眠用のスペースのようだ。

うん。間違いなくこの工場の休憩所だったようだ。小さい作りのためか、屋根のトタンも幸い目立つ穴は開いていない。壁にいたっては、憩いの施設だけはと奮発したのか、鉄筋コンクリート作りの上に板を張っている。

ともあれ、これで住の問題もなんとか目処が立ちそうだった。不



法侵入には申し訳ないが目をつぶってもらおうとしよう。元々が放置されてる物件でもあることだし。

そして、ねぐらが決まれば、やるべき事はいくつも思い浮かぶ。

「まずは掃除……だなあー」

コンクリートの床に積もった凄まじい埃をうかつに散らしてしまい、むずむずする鼻を押さえて呟いた。

工場に掃除に使えるそうなもんでも落ちてるといいんだが……

いざとなれば、箒はそこらの枝でも束ねればいいし、雑巾は朝捨てたゴミの中から使えるそうにもない服を使えばいい。

昨日とは一転して上機嫌な自分に苦笑が出そうになる。いや、でた。

「くふふ」

思ったより気持ち悪い含み笑いだった。

どうやら俺はトム・ソーヤーかロビンソン・クルソーの真似でもしていれば、こんな訳の判らない状況でも楽しめるらしい。

全くもって現金な事この上なかった。

### 三話

運良くねぐらを確保できてからは、掃除したり、痛んだ部分を修理したりで瞬く間に二日が過ぎた。

それなりに状態が良かったと言っても、元が廃屋なものには違いなので、手がかかるとかかかること。それなりにお金があればきちり修理してやりたいのだが、今は廃工場に転がっている雑多なものを組み合わせてなんとかやりくりしている。

例えば、錆びて穴が空きはじめている天井には工場の建屋で落っこちていた丁度いいトタンの破片を上から張り合わせている。接着剤はあちこちで使われていた樹脂を煮溶かしたものだ。

窓も一応あるにはあるが、窓ガラスが全損の状態だったので、これも工場内のまだ無事だった窓を移植。サイズが合わなかったので打ち付けてしまった。枠が木枠だと加工が楽でいい。

床板はかなり朽ちていたので、全て剥がし、コンクリートの地肌がむき出しになっている。今は拾ってきたダンボールを数枚敷いているが、いずれ無事そうな板材でも見つけたら張るのもいいかもしれない。

工場でもかなりの掘り出しものが見つかった。工具箱がそのまま見つかり、開けてみれば、酷い錆びの生えた工具もあったものの、それなりに使えるレベルのものもあった。例えば今、頑張つて研磨している小刀もその一つだ。幸い、砥石も普通に見つかったのでこうして研いでいるのだが、ここまで錆び錆びだったものを実用レベルまでするというのもなかなか手間の要ることではある。

一時間ほども費やし、それなりに研がれた小刀を懐に入れ、食料調達に行くことにした。

近場のデパートはこのところ試食品を散々荒らしてしまったので、さすがに行きにくい。というかそろそろ目をつけられているよなのだ。と言ってもあからさまに怪しい子供なので、目をつけら

れないはずもないとは思うが。そんなわけで今日は野で食料調達なのだ。

オラオラオラオラオラオラオラ！

ラッシュを叩き込む。その陽光照り返す水面に向かい、ひたすら、殴る、殴る、殴る。

君が！ 泣くまで！ 殴るのを止めない！

そのくらいハイテンションで暴れるのが効率がいいのだ。この漁は。誰かがこの姿を見ればなんて考えない。考えないったら考えない。

川の上流からそうやって暴れながら下流にゆっくり移動していけば、魚が追い立てられ、前もって石でせき止められているので、唯一の逃げ場所には網。

追い立て漁と言われるやり方だ。ちなみに網はなけなしの拾った硬貨で買ったダイーの洗濯ネットである。洗濯機の中で盛大に回されるのが前提の作りなので丈夫さは信用がおけるのだ。

追い込み終わって、網を回収してみるとなかなかの成果だった。知識だけで、やってみるのは初めてだったが上手くいったようだ。

「んー、ヤマメ、ハヤ……おお、こりゃカジカか。ニジマス多いな、放流でもした後だったか？」

あの最初に見た池の上流がこんなにいい感じに漁場になっていたというのは有り難いと同時に思わぬ誤算でもあった。

こういったいい感じの漁場はすでに漁協で管理されていて、今やっているようなことは露骨に漁場荒らしなのである。地元 of 漁業関係者さん、ごめんなさい。……うんまあ、見つかったら逃げるか。遊漁料払えないし。

とりあえず、まだ育っていない魚は放して、それなりの大きさの魚だけ頂くとしよう。

魚は内蔵から傷むので、ワタとエラをその場で抜いて、熊笹でくるむ。

ついでに、川辺に生えているクレソンと行きがけに目についたマダケの筍を摘んで帰る。……コゴミも発見。いやはやい時期だ。む……あれは、ウドか。ゲットゲット。

ここでも洗濯ネット大活躍である。袋代わりに丁度いいのだ。食材が蒸れないし。

一通り山の幸を収穫し、ほくほくと帰宅したのだが。

「塩買えばよかった……」

調味料がないことを思い出し、地に手をつけてうなだれていた。がつくりである。

あの漁法を思い出したとはいえ、なんで洗濯ネット……いや、これはこれで今日は大活躍だったんだが……

「うう……俺の馬鹿……」

外を見れば、真っ赤に空が焼けていた。

見事なまでの夕焼けを背景に、カラスがカアカアと鳴いている。

それがまた馬鹿にされているようで、石を投げてやったが。今の境遇にはシャクに触る歌も思い出してしまったし。

「夕焼け小焼けでまたあしたー、まーたあーしーたーってか、ああ全く」

おいしい おやつに ほかほかごはんが待ってたらそりゃ帰りたいわなあ。

口に出したら何か負けるような気がして、考えるだけにとどめた。とりあえず、味無しでも腹ごしらえをしよう、街に出ることにしよう。夜になればこの浮浪児姿も目立たないだろうし。

ぼりぼりと頭をかいて一つため息をつく。気を取り直して、家の外に作った即席のかまどに火を起こすことにした。

「おう、また見つけ」

「今晚はそれに専念しているせいか、以前よりはるかに発見率が高い。」

前傾姿勢をとり、目を爛々とさせ、小さな小さな輝きさえも見逃さない。

まさにハンターの心持ちである。

やってる事が小銭拾いでなければ、それなりにサマになっていたかもしれない。

若干人としての悲しみを感じつつも小銭の輝きは見逃さない。

しかし、この視線の低さと高スペック視力があつてのものかもしれないが、探してみると小銭ってのはかなり落ちてるものではある。絶対に人には見られたくないの、夜を待って出陣すること3時間。総計すると1000円程も見つかってしまった。すごい。

これだけ風漬しに探すとしばらくこの一帯は小銭はないだろうけど。

拾得してばかりでは何なので、ゴミ拾いも兼ねている。美化運動である。ホームレスのおっさんの行動と変わらない気もするが、ホームレスという単語で精神的に落ち込みそうな気がしたので考えない事にする。

「ぐーむ……」

背中を伸ばす。首を回す。上半身をひねってみる。背中をまくって翼を伸ばしてみる。どうもこういう時にコキコキ鳴ってくれないと柔軟したという気分にならないのはまだ以前の感覚を引きずっているせいかな。ともあれ、前傾でいるのもいい加減疲れたので背筋を伸ばす。

小さな住宅地によくある公園、街灯がぼんやりとベンチを照らしている。公園の据え付け時計を見ればすでに12時。よい子はとくに寝る時間だった。とても悪い子なので寝ないけど。うん、自分で悪い子とか考えて少し気持ち悪くなった。水道でうがい。水分補給、ついでに顔を洗っておく。

意識がしゃっきりしたところで、街灯の下で今晚の拾得物の確認をする。

拾うのは小銭だけではなく、何かの役に立ちそうなものは拾っている。カッターだの、ボールペンだの、安全ピンだの、空のペットボトルだの。何かに使えそうなものは片っ端といってもいいかもしれない。

ついでなので、ペットボトルをよく水洗いしてから、水を入れて持ち帰る。水場が近くにないので少々手間だが仕方ない。それに近くにないと言っても歩いて20分の距離なのだ。中国奥深くの、毎朝水くみに崖沿いで何キロも歩くような環境に比べればずっとマシというものだ。比べる対象が間違っている気もするが。

しかし、この後どうするか……

今日、どうするかではない。

少ないながらも小銭を得ることができたので、あと同じことを二、三回繰り返せば1000円ショップなどを利用しながら、なんとか生きることはできそうだ。ただし、その先。

まるでビジョンが見えてこない。

いつその事、この反則的な身体能力でオリンピックピックでも目指すか？ いや、翼とか生えてたら問題になりすぎるだろう。

「あるいは切つちまうか？」

一瞬そんな気になったものの、さすがにそれは気が早すぎるように思える。というか医者行ったら絶対サンプリングとられる。こんな稀少すぎる例はないだろう。下手すれば、いつの間にか行方不明とかドラマによくある展開なんてのも……

いや、それはないと思ったものの、大小実験データの作成には「ご協力」させられそうではある。……えーと、うん。先延ばしかもしれないが、やはり人にこれを知られるのはアウトだな。

はー、とため息を一つ落とし、ねぐらに戻ることにした。

人の気配を気にしながら、夜中の散歩。妖怪にでもなった気分だ。

「お化けにや学校も、試験も何にもないってかー」

ついでに仕事もない。さらには多分戸籍もない。いずれは妖怪らしく、人の驚かせ方も勉強しておいたほうがいいのかもわからない。幸い、あの廃工場はいかにも何か出てきそうでもあるし。

そんなとめどもないことを考えつつ家路につく。

明日あたりは、必需品の仕入れと図書館でも探しておくでしょう。借りることはできないだろうけど、読むのは自由なはずだ。考えてみたら、ここが海鳴市であるという事しか知らないし。というか情報収集必要だつて、思ってたかったか俺？ 思ってたな。

「……駄目だなあ俺は」

頭をぼりぼり搔いて嘆息。そろそろ痒い。ねぐらを片付けている間、水浴びもしなかったから無理もない事だったが。風呂に入りたい。暖かい風呂に。……いずれドラム管風呂でも作ってやると胸に決意した。





もうこの際深く考えるのはやめた方がいいのかもしれない。

時間遡航は不可能とか言われてなかったか？ とか、体が全く違うってことは脳も当然違はずなのに、なぜ記憶を留めておけるのか？ とか。

今度こそ、今度こそ何が起きてても驚かない。驚かないったら驚かないさ。

は・は・は、と妙に乾いた笑いが自分の口から漏れていた。

「はー……」

頭を抱えたままうつむいて大きなため息を一つ。

動揺が思ったより早く収まった事を少し訝しく思ったが、もう考えるのも面倒臭くなってきていた。

ぱらぱらと新聞をめくり読み始める。

おおむね、記憶と違いはない……というか、何年の何月に何が起きたとか、よつぼどの事でもない限り正確に覚えてない。競馬で一当てして大もうけとか、どこかの悪役の二番煎じも思いついたが、それこそスポーツ年鑑でもなければ、思い出せるものではない。上手くはいかないもんだ。

「むづ……」

新聞を元に戻し、気分を戻すためにトイレに。

すれ違ったおっさんがぎょっとしていた。失礼な。一応今日は人前に出るので、午前中に服も体も洗ったというのに。臭いか？ 臭うのか？

自分で嗅いでみるが判らない。鏡の前に行っただと理由に気づいたが。

「……………ああ、見た目がヤヴァいの忘れてた」

「このところ人を避けていたというのもあるし、気にしてる余裕もなかったというのもあるが。」

「そういえば、結構な厨二容姿だった。」

「んん？」

鏡を見ていたら、ふと違和感に気付く。

頭頂部から右斜め前にひよろつと触覚のような髪が……

「おお、これが噂に聞くアホ毛というやつか」

鏡みたいに細かく映すものでないと気付かなかった。わしわしと頭をかき混ぜてもひよろつと出てくる。しかし、これはアホい。目をきつくして睨み付けてみる。しかしアホい。俺はごくりと唾を飲み込んだ。

「すごいな、アホ毛の性能。何というシリアスブレイカー。どんな情景描写でさえ、最後に『アホ毛が静かに揺れた』を加えればギャグ空間にしかないぞ」

そんな馬鹿な事をぶつぶつ呟いていたら随分と気分転換にはなった。

我ながらアホなことである。

図書館で、食用になるキノコのスケッチや、この辺一帯の地理などをメモっていたら、閉館の時間になってしまった。

途中で司書さんがこちらに気付いたらしく、何か話しかけようと

してくる。逃げ続けたが。

捕まったら、学校のフィールドワークの一環です。とても言うっておこう。欧米人に見える姿だし、勝手に深読みしてくれるだろう。きつと。

まずまず、有意義だった。

ねぐらに戻ってから整理しないといけないが、多分この答えで合ってると思う。

「この世界は『俺』から見てパラレルワールド」

海鳴市という単語に覚えがないのも当然。地図を見たら日本の形が微妙に違っていた。

都道府県の名前も一部聞き慣れないものがある。なんだよ犬上県って。

歴史もちらっと見た程度では判らないものの、何らかに違いは出ているのだろう。

何より、すんと、面白いように腑に落ちた。

ああ、そりゃ俺の家族も友達も街すらも存在しないのも説明つくわ。

「いや、しかし……波瀾万丈すぎる」

すでにお腹いっぱいです。

小説や漫画の異世界召還された連中はよくこんな状況で頑張れるな。そろそろ俺はへこたれそうだぞ？　なんかもう、リスク考えてもそこらの病院に入って、記憶が変なんですーとか言って保護してもらおっか？　なんて思いついてしまっくらい。そんな愉快な事しないけどね。

「後は、なんでこんな体なのか……だが、それこそ訳判らんよなあ」

もうそういうもんだと思うしかない。

ともあれ、しばらくは細々と暮らしながら図書館通いの暮らしが続くことになりそうだ。

いずれはまともに戸籍持って、かつてのように小さいながら飯屋でも構えて、人並みに暮らせるようになれば……いいなあ。

夕暮れに染まった道を歩きながら、ちよつとばかり黄昏れた。

## 四話

5月も末に入り、そろそろ気温も高くなりはじめ、同時に雨雲が  
かかりやすくなった。

流石に何度も何度も落ちてきている金銭を頼りにするわけにもいかな  
いので、最近では、海沿いの防波堤や磯で釣り客向けに飲み物や弁  
当、釣り餌を売っている。

朝釣りをする人は多いので、特にかきいれ時でもある。と言つて  
も自分で弁当など作って販売するには許可もいるし何より責任もと  
れない。早朝からやっている弁当屋さんの弁当を買ってそれを少し  
高く売るというだけだ。

と言つても、釣り人そのものの数が多いわけではなく、近くに釣  
り具店がないのも食べていけるほど売れないからだろう。……そん  
なスキマ産業的な商いだが、平均して一日500円前後の収益が出  
るので、有り難い限りではある。もっとも、見た目でちょっと引か  
れて最初は買って貰えなかったが。今は名物と化している。アメリ  
カでは子供のレモネード販売が社会勉強になっているんだよーとか  
言っておいたから、そんな小遣い稼ぎ兼社会勉強と思われる可  
能性は高いが。

実のところ他にも試したこととして、よく聞くアルミや鉄材の収  
集を試してみたことがある。ホームレスの人たちが空き缶を現金に換  
えているあれだ。幸いねぐらとなっている廃工場には分解すればい  
くらでもリサイクル可能な資源がごろごろしている。

ただ、やはり買い取って貰えなかった。それどころか、親は何し  
てやがるんでえと怒られた。考えてみたら当然だったかもしれない。  
社会実習とでも言っておいた方がよかつたか……。戦後すぐの時代  
だったら子供でも鉄くず買って貰えたのだからうけどな、残念だった。  
さらにもう少し暖かくなれば、砂浜でバーベキューなどする人が  
増えるだろうから、炭やガスボンベ、足りなくなりがちな調味料な

どの売り歩きもいいかもしれない。

売り歩きの姿を外から見たらかなりシユールだろうけどそれはもう気にしないことにした。気にしてたら生きていけない。

そんな生臭い事をつらつら考えつつコンビニに向かう。今日は弁当はもとより、釣り餌やストックしていた釣り道具も残らず売れたので、収益が大きかったのだ。たまにの贅沢として甘いものを買うというのもいいだろうと思うのだ。……いや、素直に言えば甘いものが異様に美味い。舌も子供化を起こしているのかもしれないが。きまぐれにプリンを食べた時どう表現してよいか迷ってしまうくらい美味かった。不思議なものだ。

一度、ねぐらに戻り、売り歩き用のクーラーボックス、まあ発砲スチロール箱に布を張っただけなんだが、を置いて、近場のコンビニに向かう。

店員に胡散臭げな顔をされながらも買う。ちょっとだけお高い、某なめらかプリンである。先ほどから翼がうずいて仕方がない。感情に反応するとか犬の尻尾か？ そりゃ店員に胡散臭げに見られるというものだ。

どうせなら見晴らしの良い場所で楽しもうと、地図を思い出して、ちよつとした高台の八束神社に向かう途中の事だった。

ネズミ嫌いの猫型ロボットの出てくる国民的アニメ、あれに出できそうな空き地が通り道にある。そりゃもうザ・空き地！ というくらいに見事な空き地なのだ。工事に入る前に企業が潰れたりでもしたのか、古い建材がちまちま積まれている。定番である土管も見事二段重ねになっている。それがどうなるかというと、近所の子供にとつて、十分すぎる遊び場になってしまうのだろう事は想像に難くない。

積みまれている建材とか、少し危ないだろうと思って、以前通った

時に見てみたのだが、誰かが既に対処したようで、崩れないように固めてあったりしてあって、無用の心配だった。誰がやったかは知らないが、親御さんの誰かかもしれない。子供の事を見ていないようでもよく見ているものだ。

ちなみに、末日である今日は日曜日で、そんな空き地で今日も元気に子供が遊んでいた。微笑ましくなるものの、遊ぶというには少し騒ぎが大きすぎないか？ と思う。

ちらつと覗き込んでみると、どうも空き地の領有権を巡っての小競り合いの最中だった。小競り合いというか喧嘩ごつこというか。一対一でお互いの陣営が人を出して喧嘩してるようだ。……ああ、そういうえば今の時代ってK1全盛期だったか。ピーター・アーツ、マイク・ベルナルド、アンディ・フグ、アーネスト・ホースト、サム・グレコ。綺羅星のような華のある格闘家が集まっていた時代だ。こちらの世界でも存在するのはスポーツ新聞で確認した。

「おお、ツバサ君だ。ヘルプ頼む！」

ぼーっと思い出にふけていたら、お声がかかってしまった。見れば、先日ちよっかいをかけてきた二人組の子供に見つかってしまったらしい。めざとい。

確か背の高くてひよろつとしたのが安田で、背は小さいが元気にちよろちよろしてるのが南部だったか。何とはなしに1600メートル走でも走らせるとよさげな二人だ。

この二人に会ったのは二日前。場所は同じくこの空き地で「おお、ド えもんそのままだ」と土管に乗って悦に入っていた時だった。この二人はどうも同年代のリーダー的な存在のようで、自分たちの遊び場である場所に得体のしれない見た目外人の子供が居ることで警戒したのだろう。第一声は「おまえ誰だよ？」だった。多分に攻撃的なものである。

見た目の年は同じくらい。となると、小学校三年生くらいか。ランドセルを背負っているところを見ると学校の帰りに寄ったようだ。

「ちよいちよいと子供扱いしていると何かスイッチが入ったのか」「うおーっ」とかチビの方が突進してきたので、がっぷり上手を取ってがぶり寄り、寄り倒し。いや、頭を打たないように手を挟んでる。残った方が慌ててしまつて行司の真似事をしてくれなかったのが残念だったが。その後も童心に帰つてしばらく遊んでいたのだ。

思えば、人恋しかったのかもしれない。名前を聞かれた時も、うやむやに誤魔化してさらつと居なくなることもできたのだが……。たとえば、思いつきの名前でも呼んでほしいと思つてしまったのは。

思いついたのは白井ツバサという名前だ。三秒で考えた。ネーミングセンスについては自分でも有り得ないレベルだと思つている。今更だ。……まあ、親が某サッカー少年の漫画が好きだったとも言えはいいか。

しかし何とも血気盛んと言おうか……この安田と南部のツートップは自分たちの遊び仲間を率いて、上級生と遊び場の権利を賭けて対決しているようだった。聞いてみると相手は二年歳上らしい。体格差もあつてなかなか勝てないようだ。聞けば、すでに10戦連敗。下級生グループは意地と負けん気でやつてるようなものらしい。……上級生はそれ遊びとしか思つてないだろ。

ともあれ、ここは混ざつて大暴れするのも大人げないので、盛大に大人げない振る舞いをするに似た。大体ヘルプを請われたからには答えねば男が廃るといふものだ。身体は……いや何も思つまない。

「先生頼みますぜっ！」

安田、お前はどこのチンピラだ。犯人はヤスとダイイングメッセージを意味もなく残すぞ。



大暴れと言っても、二人抜けばいいようだ。どうも五人制の勝ち抜きのように、今のところ二敗一勝のようだし。ルールを考えたやつは空手漫画とかの影響も受けてそうだな。先鋒次鋒とか言ってる。一人目は奥衿と袖を掴んできた。あれ？ 柔道？ おお、綺麗に大外刈りをかけられた。しかも、怪我させないようにこちらを浮かせてる。本当に五年生かこいつ。と言っても、技をかけられてる最中にそんな長考がいくらくらいに余裕でもあるんだが。

相手の軸足に、よろつと右足を絡めてやるとバランスを崩して倒れる。マウントポジションになってから頬をつまんで引き延ばす。上上下下左右左右とコマミコマンドを引つ張った頬に叩き込んでいるうちに10カウントが終了。予想外の行動にやられてる方も啞然としていたようだ。勝利。

「ういなー」

気が抜けそうな勝ちどきなのは勘弁してほしい。真面目にやっけたまるか。

二人目の相手もまあ、適当に遊んで勝った。というか体格も小さいのにこの身体はスペックが高すぎる。実は吸血鬼とかいうオチだったりしないよな、と意味もなく犬歯を触ってチェックしてしまったり。

と、そんな感じで自分の身体の不思議を思っている俺を置いて、安田と南部が勝ち誇っているが、どうも雲行きはすんなりと行かないようだ。

俺が二人目に相手したのは、なかなか負けず嫌いだったようで、しかも下級生になどとは……というプライドの高い子だったらしい。こちらも助っ人を呼ばせてもらってもう一戦だ。文句言つなとか言っている。

「いや、俺はそろそろ行こ」

「乗った！ こっちにやツバサがついてるかな。簡単にや負けないぜ。今までの借りをまとめて返してやらあ」

「……うかと」

南部くんや、それは虎の威を借るようで男の子としてはどうかと思っぜ？

その台詞を聞いてニヤツとした上級生は取り巻いてる子にその助っ人さん呼びに行かせた。「クラスメイトの一大事だと言って引っ張ってこい」とか言ってるが、これってそんな一大事だったのか？

うんまあ、小学生の思考回路はさすがによくわからん。

待つてる間、暇なのでダせていたら、さすが小学三年生、安田と南部も含めて持ってきてきたサッカーボールで遊びはじめてしまった。先ほどの柔道やってたっぽい五年生の子もそうだったが、運動神経の多いのが多いようだ。輪になってリフティングをしながらパス回しをしているようなのだが、上手い上手い。単純にサッカー勝負でもすれば上級生に勝てたんじゃないか？ と思ってしまう。

そんな様子をぼーっと見ながら、いい天気だなーと土管の上でへたれていたら、どうやらその上級生の助っ人が到着したらしい。着いて、様子を一別するなりとても帰りたそうにしていたが。

「……で、どんな一大事だった？」

無表情だ。子供ながらにして精悍さを感じさせる顔というのは珍しいかもしれない。そんな顔でぼそっと呼び出した上級生に聞いていた。

なにやら、その上級生が拜んで頼むよーとか言っているが、まあうん、呼び出された方としてはいい気分ではないわな。「話にならん。帰る」とか言っている。

何となくその無愛想な子に軽く同情していたのだが。こちらも早くプリンにありつきたいので、帰るなら帰るでよしなのだが。

「おー！ ネクラ女の兄貴なんて敵じゃねえよ！ とつと帰れ帰れ」

空気の読めない事に定評のある南部がとても燃えやすい燃料を投下した。

先の一言と共に空気が軽く凍り付いた事にも気付いていない。パネエ。

「……そのネクラ女とは美由希の事を言ってるのか？」

「おう。あんたあの高町美由希の兄貴だろ？」

同じクラスなんだぜ！ とか言ってるが、駄目だこいつ。早く何とかしないと。空気の読み方と人様の家族を悪く言っちゃいけませんんと言っておいた方がいいのか。

なんだかその無愛想な、ええと、美由希ちゃんの兄？ が、ゆらありと向き直る。

「気が変わった。受けよう」

「よ、よっしゃ、頼むぜ先生！」

安田、声が震えているぞ。そして押し出すな。

なんと言うか、うん。勝っても負けても南部には謝らせるとしよう。子供のうちだからこそ、直しておかないと……。放置しておくところからも舌禍を引き起こしそうだ。

俺が押し出されると、訝しげな顔をされた。視線は南部に注がれている。……。ああ、南部が相手だと思ってたんだな。

ちよいちよいと肩を叩き、声をかけるとする。

「あー、その。気持ちは判るんだけど、相手は俺なんだ。すまない」  
「……そうか」

どうもげんなりしたようだ。

ああ、言ってみればお互い巻き込まれたもの同士だな。

「高町恭也だ。……上級生を二人とも下したと聞いている。何か武道でもやっているのかもしれないが、こちらも古武術を少々嗜む身だ。遠慮なく来るといい」

この人はこの人で本当に小学五年なのだろうか？ いや身長や体格はそれっぽいけど、口調とか言動が老けすぎだろう。嗜むとか同世代が言われても判らないんじゃないか？

というか歩いてても体がまったくぶれていない。武術とか程遠い俺でも判るくらいにぶれていない。こう言うのを隙がないと言えはいいのだろうか。

「一応、白井ツバサだ。よ、よろしく?」

名乗りとか知らないのでとりあえず片手をあげてよろしくしてみる。なんだかさらにやる気をそいでしまったようだが、仕方ない。

こちらら、格闘技なんて学校の授業以外でやったこともないのだから、相撲や総合格闘技など見るのは好きだったが。

結果からすると負けた。かなりあっさりと。……だがなんだろうこれは。

目の前で高町恭也が頭を下げている。

「知らなかったとはいえ、すまん」

とか言ってる。微妙に顔が赤くなっているが。低学年に頭下げ羞恥心か？

いや、本当に頭下げられる覚えがないんだが。なんだろう。んー、確か流れは……

開始から投げ技か腕を取りにきたので避けてたら、何か蹴りだの何だのと飛んできて、それでも頑張つて避けてたら、ニヤアとか楽しそうに笑つてあばばば（形容不可）な事になってきたので、あれだ、足を払いにいったのだが、股ぐらを掬われてそのまま投げられた？

「ああいや、謝られる理由もないんだけど、さっきの技つて掬投げ？」

「よく知ってるな、小柄な相手には有効なんだ」

ちなみに、古流の場合後ろから鞆丸を握り潰して硬直させて投げられるようにも作られている。とか聞かされた時には股間がひゅんとなった。今はないけど。

「つか、なんだ？ 高町、さんの異様な強さは。武術嗜んだってレベルじゃないだろ？」

「幼い頃からやってたからな。立てるか？」

そりゃ立てるが、いや驚いた。この世界には武術の達人の小学五年がいるらしい。一応今のスペック、蠅を箸で捕まえて宮本武蔵ごっこか出来るんだが、それでも目が追いつかないスピードって何？ いや何というか……

「世の中広いもんだな……」

独白はため息と共に吐き出された。

とりあえずは、このすげーすげーと騒ぐ南部に一言物申しておくか。謝っておくようにと。

その後は何だか、先の立ち会いで毒を抜かれたらしく、上級生グループが時間を置いて場所を使うということで落ち着いた。てか、エアガンを皆持っていたところを見ると、ここを射撃場とするつもりだったらしい。丸く収まったところで、そろそろ行くでしょう。ちよっと関わったつもりが、一時間ほども過ぎていたようだった。…あ、プリンがぬるまってそうだ。

おざなりにじゃーなーと声をかけて、神社へ向かうことにしよう。

「……お？」

「む？」

「高町、さんもこつちに用事か？」

……言いづらいなら名前でもらっていい、と言われた。なら俺の事もツバサと呼んでおいてくれと言い、改めて名前でもらわせてもらう。小学生に敬語つけて呼ぶのは、こつ……何ともむずむずするものがあったのだ。見た目年上とはいえ。

その恭也だが、どうもこれから鍛錬だと言うときに呼び出されたりしく、奇しくも行き先が同じだった。八束神社である。しかし、日曜の朝方から何やってるんだ、とも言いたいような。余り覚えちゃいないが『俺』がこのくらいの時は日曜に限らず遊び回っていたような……口を出すべき筋合いでもないけど。

ほつぽつと時折会話をしながら、のんびり歩く。

どうもこの恭也という奴は沈黙が嫌いではないタイプのようだ。無口というのともちよつと違うようだが、無愛想……というのも最初の印象だけだったな。判りにくいだけで。同道していると少しは判る。車が近づいてきたらさりげに車線に近い方に動いているし、

向かいから自転車などが来れば、自分が半歩先に進んで避けさせる。年下の引率は慣れているという風情でもある。

何にせよ、そう子供子供した精神なわけでもないようで、どんな生き方したらこうなるのかは判らないが、付き合いやすくはあった。ただ、趣味で最近盆栽に手を出していると聞いた時はリアクションに困ったが。ある程度成熟というよりこいつ中身、老成してないか？

時期が時期なので、道ばたのハマナスの紅色を愛で、アジサイもぼちぼち見頃ですなあなどと話しながら歩く。

『はまなすの丘を後にし旅つづく』の句を思い出して、旅情そそられるものでもあるな、などと話し合い……

いかん、つられた。老人の寄り合いのような会話になってしまった。小学生にして何という爺むささか。しかも片方は明らかに日本人離れした外見。シニールにも程がある。

「用事は終わった、恭ちゃん？ ……えあ、だ、誰？」

神社の階段を登り終えると広い境内が見え、女の子の声が降ってきた。

ああ、しょうもない用事だったよ、と言いながら女の子に近づくと恭也。ああ、どうやらこの子が妹の、みゆきだっけ？ 南部が言っていたネクラ子ちゃんか。

ちよつと失礼な事を考えながら見ていると、……別にネクラという風にも思えないが、人見知りの傾向はあるようだ。恭也の後ろにそそくさと隠れてしまった。頭の後ろでまとめている三つ編みがひよこひよこ恭也の陰から出ている。何ともその小動物めいた動きにほんわかしてくる。恭也はいつもの事らしく一つ苦笑してから言った。

「先の話にも出てきたが、妹の美由希だ。そういえば……聞いてい

なかったが同年代くらいじゃないか？」

年齢10歳くらいに見えるので、あなたが間違いない。肯定すると、あごに指を当ててしばし考え、妹と仲良くしてやって欲しい。と言い、少し離れてアップを始めた。これはあれか、後は若いものでごゆっくり。という奴なのだろうか？

高町美由希はおろおろしている。突然の事態に混乱しているようだ。

俺は恭也の計らいに感謝をささげつつ、初々しくうろたえている美由希の膝の後ろと頭の後ろに手を伸ばし抱きかかえ。片手で挨拶をする。

「じゃあ恭也、また後日」

「人の妹をナチュラルにさらうな」

「……ちっ」

そこはまあ、冗談だったので普通におろすが。ちよっとお持ち帰りしたいと思ったのは秘密だ。

しかしなんだろうか、ロリペドからは遠く離れた趣味だったはずなのだが、子供子供した仕草がこれほど可愛く見えるとは……。いや、思えば空き地の子供の時もそうだったか。むっ……保護欲求というものだろうか？

……ああ、投げっぱなしの冗談の後に放置してしまった。なんだからやるせなさそうにこちらを見ている。視線が痛かった。

とりあえず、定型通りに何のひねりもなく自己紹介と挨拶を交わした。他愛もない話を振ってみたりしているとさすがに緊張も解けてきたのか、普通に話してくれるようになったが。

そういえばいつ知り合ったのかと聞かれて、つい先程だよと言った時は信じられないようなものを見る目で見られた。さらにはこの一言である。



「…あ…あの、ぶつきらぼうな人だけど悪い人じゃないから、恭ちやんをよろしくお願いしたくて。剣と家族の事ばかりで男友達は今まで誰もいなくて…ええ、と、その」

言葉が思いつかなくなったのだろう、次第にごによごによ言葉が小さくなっていく。しかし、言いたい事は判った。天を仰ぎたくなつた。妹に心配されてんぞ恭也くんや。…というか判りやすいな、兄は妹を心配して妹は兄を心配してって、既にして相思相愛じゃないか。砂糖吐くぞ。

「…?」  
「一つだけ判つたのは、この二人どっちも友達少ないらしい。ん…」

「剣?」

さらつと流してしまつたが、古武術とか言つてなかつたつけ? 見れば同じく「?」を顔に浮かべて首をかしげている美由希。

「別に隠すつもりでもなかつたんだが、うちの流派の中心は小太刀だからな」

アップを終えた恭也が近づいてきて解説してくれた。何でも家で伝えられている古い流派なんだとか。使う武器の事はぼかしていたものの、種類って事でもなさそうだ。しかし、小太刀二刀ねえ、何というか…

「忍者にしか思えん」

「俺もたまに思つ」

思ってるんかい。

「ただ、国家資格を取れるほど忍者らしい訳ではないな。やはりあくまでもうちの武術だ」

あるんかい国家資格。なんだかこちらの世界にびっくりである。実はこの世界の連中って、背中の翼程度じゃ驚きもしなかったりするんじゃないだろうな。必死こいて隠してるのが馬鹿馬鹿しくなってくるぞそれは。

……と、大分話し込んでしまっていたな。美由希ちゃんも兄を待ってるようだし頃合いだろう。

「長々と話しちゃったな、鍛錬があるんだろ？ そろそろ邪魔にならないところでも行っとくよ」

「む、そうか。ところでツバサは神社に用事でもあったのか？」

「おお！ プリンを見晴らしの良い所で食べようと思ってね」

何とも言えない微妙な表情を浮かべた二人を残し、景観の良い場所を求めて散策を始めるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7834x/>

---

道行き見えないトリッパー

2011年10月26日03時08分発行